

浄土



昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受承認雜誌)第三五二号
昭和四十六年八月二十五日印刷 昭和十六年九月一日発行

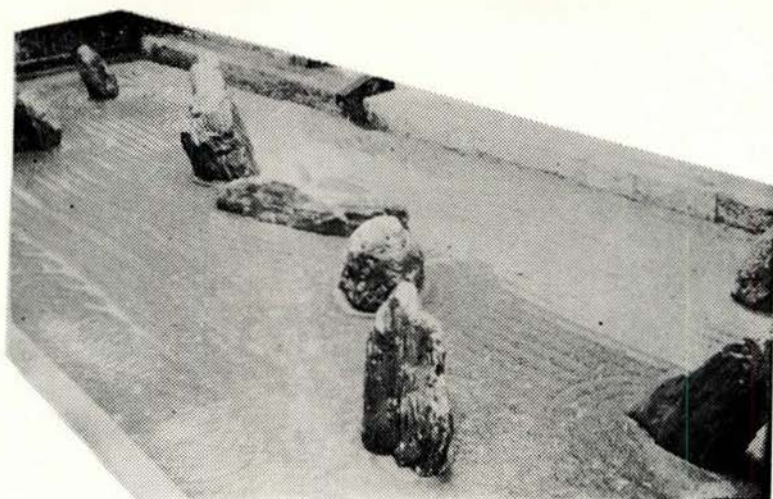
第三十七卷

第九号

1971

9

九 月 号



目 次

表紙「仏足」松壽達文画

すみぞめの心……………	金 田 明 進…………	(2)
二つの歌碑〈上〉……………	岸 信 宏…………	(4)
彼岸会によせて 彼岸のひかり……………	北 村 謙 順…………	(8)
特集「政治と仏教」		
浄仏国土成就衆生……………	栗 本 俊 道…………	(12)
共生浄土の実現……………	稲 岡 覚 順…………	(15)
政治と仏教の接点……………	白 幡 憲 佑…………	(17)
昭和法然上人伝 七か条制誡・興福寺奉状……………		(20)
浄土歳時記《きくづきの巻》……………	若 林 隆 光…………	(22)
孝子善之丞物語②……………	吉 田 光 覚…………	(24)
小学生の声 縁起……………	柴 田 直 美…………	(26)
「蓮」蓮華王院への道……………	高 橋 良 和…………	(29)
浄土宗の古刹をたずねて……………	佐々木 洋 之…………	(32)



語和声念

悲しき盲亀

七月三十日午後二時四分。一六二人の生命が一瞬にして失われた全日空機と自衛隊機の衝突事件のニュースを、その日の夕方のテレビニュースで聞いたとき、一つの情景が心に浮んだ。

ひろい、ひろい、無限のひろがりをもつ大海原に、一匹のめくらの亀が、流れのままに、あてもなく、ブカリブカリと泳いでいる。すると、どこから流れて来たのか、一つの木片が、これまたブカリブカリと近づいてくる。その木片には小さい穴が一つあいている。波のかげんか、流れのせいかな、盲亀と木片とが一瞬ぶつかった。その拍子に木片の小さい穴に亀の首がスポンとはまったのである。

無限の大海に浮んだケシツブのようなこの二つが出会うことさえ不思議なのに、穴の中に首がはまったということは、まことに有り得べからざる不思議といわなければならない——この不思議が、現に、花巻市北方の上空でおこったのである。しかもそれは、仏教で説く仏縁の不思議さとはウラハラに、まことに悲しい出会いとなってしまったのである。

空路の過密だとか、仮想敵視だとか、不注意だとか、いろいろの原因が取り沙汰されている。そうした個々の原因をあげつらうのもよいが、盲亀の浮木の穴に会うということの意味、つまり千載一遇の出会いが、目に見えぬ糸によって仕組まれ、その上に人間の生存が懸けられているのだという事実を洞察することこそ、仏者としてのつとめではないだろうか。

亡なられた方々の御冥福を祈るとともに、この出会いの底にあるものに、深く思いを致したいものである。

(竹中)



すみぞめの心

金田明進

(茨城・取手市弘経寺住職)

烏帽子もきざる

浄土宗の開宗八百年を三年後にひかえて、つくづくと感じますことは、法然さまにかえることです。墨染の衣にねずみのお袈裟をかけられた法然さまのお姿を慕わしく思います。

私は大五重という宗門の催しや、正伝法の開講のときに、大ぜいの宗侶たちが、墨染の衣をつけて参加したことを思います。又法然さまの七百五十年の御忌法要が総本山知恩院で行われて全国の宗侶が黒衣如法衣で参列し、御門主さまが、墨染の衣とねずみ色のおけさの質素なお姿で法然さまの御廟へお上り下さった、あの光景をなつかしく思いおこします。

浄土宗はあの清楚な姿が一番ふさわしいと思われまふ。なぜ、私たち宗侶が色ごろもをつけたり、きんらんの袈裟をつけることになったのかと反省するのです。八百年前の法然さ

まはいつでも、すみぞめの衣にねずみのおけさで、お珠数をつまぐりお念仏をとなえておられたのです。

身なりがはでになりますと、自分の心もはでになりがちです。そんなことを今更いつてみても、私はじめ宗門全体がこれを改めて、すみぞめの祖師のお姿にかえることは、むづかしいことでしょう。しかしここに大事な宗門人の反省が必要だと存じます。

お互いの心がおごって、名誉を求めたり、地位をのぞんだりするのも、その服装に原因があるかと思われまふ。「烏帽子もきざる」法然さまを、しっかりと私どもの心の中に受けとめねばなりません。法然さまがお教え下さった愚鈍念仏もここから出発せねば本当に受けとれません。

すみぞめの心

私はこの法然さまのお姿を通して「すみぞめの心」を味わいたいと思います。お釈迦さまの仏教が、だんだんムツカシクなつて、仏教が学問にかたよつたり、堂塔がらんに表現されたりして、人間の日常生活からかけはなれて来たとき、法然さまは、お釈迦さまの仏教を庶民のものにとりもどすためにナムアミダブツのお念仏とされたのでした。お念仏の中に本当の仏数があり、本当の宗教心が育ち、生活のよるべのあることをおさとし下さったのが法然さまです。私はそれを「すみぞめの心」と申したいのです。一文不知のおろかな者でも、無位無官の貧しい人々でも、ナムアミダブツすることによって、光りが与えられ、力が与えられ、本当の人生が開かれることを法然さまは力よく主張されたのでした。

今日、学問のある人々も、財力のある人々も、みな「すみぞめの祖師の心」にかえてひたすらに念仏申すことが肝腎と存じます。そうした仏教の実践が、今日の社会を浄化する唯一の道だと信じます。

ほこりをすてて

「信仰ほこり」ということがあります。私こそ熱心な念

仏者であると自認する人々、私こそ念仏を伝道する教化者と自負する人々は、そのほこりを捨て去つて、も一度すなおな愚者に立ちかえらねばなりません。愚者の自覚に立ちかえらねば、本当のお念仏は出来ないぞと法然さまはおさとし下さっているのです。篤信といわれる人も、学者といわれる人も、「みなともに凡夫のみ」と反省して、行住坐臥にナムアミダブツすればよいのです。そうすれば、アミダさまのお念仏が、私のお念仏と一つになって頂けるのです。

自ら下坐して

すなおさがなければ手が合わされません。すなおさがなければお念仏が声になりません。そのすなおさは自分が下坐することから生れて来ます。今開宗八百年を迎えて、宗団の組織が語られます。しかし組織以前に信徒と宗侶の総さんが大事です。回心が大切です。七千余の浄土宗寺院宗侶、寺族が、自ら下坐し、自らさんげし、檀信徒と共にすなおな念仏を同行することが、開宗記念の唯一の事業と存じます。今から三十余年前、法然上人讃仰会が誕生し宗門こそつてその趣旨に協賛し、吉田絃二郎、佐藤春夫等の文豪ひとしく毎号浄土誌上に筆をとり、大方の書店に販売されたことを思い、今、心を新たにしてい、法然さまへの真の報恩を、この誌上にもり上げて頂きたいと存じます。



私の拙い和歌の碑が、近年二ヶ所に建てられました。一つは私の前住地である和歌山県田辺市の奇絶峽（きぜつきょう）の、山腹の弥陀三尊の磨崖仏を讀えた、私の和歌が碑となったのであります。一つは私の生家、愛知県中島郡平和町法立（ほうりゅう）の庭前に、私の母を思う和歌が碑となったのであります。和歌は拙いものでありますが、それが碑となって、後世に残されることは、私一生の感激でもありますので、そのことについて左の如く記して置きたいと存じます。

二つの歌碑

< 上 >

——浄土門主——

岸 信 宏

一 奇絶峽の歌碑

私の師籍であり、前住地である和歌山県田辺市の浄恩寺の門前を、会津川（あいづがわ）という川が流れて、田辺湾に注いでいます。

この川の上流に奇絶峽という溪谷があって、あまり大きい規模ではありませんが、奇巖巨石の累々とつらなつた一区域があります。小さい滝もあり、景勝の地として和歌山県の指定名勝地にもなっています。春は桜、秋は紅葉の眺めもよく、田辺市民の行楽の地となっています。

流れを距てた山の中腹の巖壁に、昭和四十年、堂本印象画伯の原画弥陀三尊を拡大して、彫刻せられたのであります。この発願者は、田辺市在住の表具師橋本豊吉氏であります。同氏は堂本画伯と旧知の間柄であり、田

辺市の近くの白浜温泉に、画伯が別邸を持たれるのにお世話をせられたり、法隆寺壁画の模写の表装を手伝ったりせられたことがあるように覚えています。近年、文部省が各方面の技術者の表彰をしています、その第一回に表装技術の方面において表彰を受けられた人であります。浄土真宗の熱心なる信者であります。

かねて田辺地方景勝の地に、石仏建立の誓願をもっていられたのであります。諸方を探索せられて、前記奇絶峽の中腹に石質のよい一枚巖の露出せるのを発見し、それに堂本画伯の原画による弥陀三尊の石仏を、浮彫りにすることにせられたのであります。

県の許可を得、田辺市当局、田辺市観光協会、地元の上秋津（かみあきづ）愛郷会の協力を得、堂本画伯の実地見分と指導とのもとに、石工も京都より招き、危険な場所でありますので、大がかりな脚場を組み、三ヶ月の日子を用して完成したものであります。

中央の阿弥陀仏は二重の蓮台の上に結跏趺座（けっかふざ）をせられ、二重の光背（こうはい）を持っていられる。高さ七・三メートルありますから、奈良の大仏さまの約半分ほどで、日本における磨崖仏としては最大のものといわれます。両脇侍の観音、勢至の二菩薩は二重の蓮台の上に腰を掛けられ、両脚を交叉して垂れていられる、新しいポーズをしていられます。いずれも厚肉彫りでありますから、対岸の路傍から、よく拝むことができます。

四十一年の四月八日に開眼供養が行われたのであります。その時、私は次のようなお祝の歌を橋本氏に送ったのであります。

大きな岩に弥陀三尊を浮き彫りす

千代につたへてみ法とくなり

昨四十五年四月に、私の前住地田辺市の淨恩寺において、五重相伝が行われ、私がその

伝法を行うこととなりました。この機会に橋本氏が、前記の私の和歌を歌碑にして、現地に建てたいという連絡があり、石の大きさに合わせて、拙い歌で、また拙い筆蹟ではあります、前記の歌を揮毫して送って置いたのであります。

淨恩寺の五重相伝は四月一日より五日まで行われ、勸誠は野島宣道上人でありました。私は四日に参り、その日の午後、剃度式を行い、五日に相伝の儀式を行いました。六日に歌碑の除幕式に併せて、磨崖仏建立五周年の記念法要を行うこととなりました。

その日の午前中は、私の淨恩寺住職時代に親しくして頂いた方達のお宅を七軒訪問し、お内仏で簡単なる御回向をし、最後の七軒目は脇村義太郎氏宅でありました。脇村家は代々淨恩寺の筆頭総代でありましたが、現当主義太郎氏は東京大学経済学部教授をしていられ、今は停年で退職をし、逗子に住んでいますが、御先祖の法要など御用のある時

は、この本宅へ帰省されるのであります。ちやうどこの時は帰省中でして、お内仏回向のあと昼食を共にさして頂きました。平常は妹様で、この度の戦争でご主人を失われまして、たちあ子様という方が、一人の娘様と共に留守をまもっていられます。表向きの用事は本宅の近くにある分家のあとを嗣いでいられる、孝三郎という弟様が差配をしていられるのであります。義太郎氏の次の弟様の礼次郎という方は三菱銀行の重役をしていられたのですが、今は停年退職をして、現在は鎌倉に住んでいられます。礼次郎氏の奥様は正田家出身の方で、東宮妃殿下美智子様の伯母様にあたります。因みに義太郎氏は本年（四十六年）の四月二十九日の天皇誕生日に勲一等叙任の榮譽を受けていられます。

午後一時、奇絶峡で行われた私の歌碑の除幕式には、脇村義太郎氏御夫妻も参拝して頂きました。田辺市長の野見千吉氏、市の観光局関係の方々、地元の上秋津愛郷会の人達、

市の仏教会長曹洞宗法輪寺の瀬戸道印師も列席して下さいました。

まず歌碑の傍に祭壇を設け、対岸の山腹の弥陀三尊の磨崖仏に向って、建立五周年の記念法要を行い、次に歌碑の除幕式を行いました。歌碑は磨崖仏を最もよく拝み得る対岸の路傍に建てられてあります。歌碑の前に張られた紅白の布の紐に私が鉢を入れて切り、歌碑を覆うてある白布の幕は、頼主橋本豊吉氏の孫様二人によって、幕についた布綱を引いて、白布の幕が除かれたのであります。白石はその所にあつた、恰好の石を県の許可を得てそのまま使い、碑の石は四国の小豆島より取りよせたものとのことでした。

除幕を終った後、碑の上の展望台の芝生に布かれた毛氈の席で御祝の野宴が開かれました。

奇絶峡磨崖の仏たたえたる

歌碑の除幕に桜花ちる



彼岸会によせて

彼岸がんのひかり

北村 謙 順

(神奈川県足柄上郡西念寺住職)

今日彼岸 仏の種をまく日かな

秋のお彼岸を迎えることになりました。暫しばく静けさを保ったお寺の境内も、参拝の人の群で活気づく彼岸であります。墓地は香煙がたな引き、墓前に冥目合掌の姿が見られます。

本堂からは、法要の読経が聞え、木魚の音が流れて参ります。家庭に於ても改めて仏壇を清め、香花灯燭こうとうしよくを上げ、供物を捧げて、家中の者が、お参りをいたします。これが彼岸の間中に見る、日本人の光景であります。

彼岸は「極楽の門があく時」だといひなら

わされて来ました。極楽へ行きたかったら、この時に善根をしたらよいことになります。お彼岸参りの善業が、大事ないわれでもあります。

日本の祖先達は、亡き人の霊の冥福を祈ることを中心として、彼岸の善業を行って参りました。その心情は、祖先先亡の霊たまも又、必ず極楽の善果を得ることを信じたのであります。

祖先の冥福が、生きている者の悦よろこびとして結ばれるおもいが、お彼岸の時の心ではありませんか。

有縁の霊のみではありません。ひろく無縁





の靈にも及ぼして、一切精靈の冥福を祈ることも、すぐれた彼岸の善業であります。慰霊祭や放生会が営まれるのも彼岸が多いのであります。鎌倉の大本山光明寺では、動物の慰霊祭が、春秋の彼岸に行われておりますが、わが子を失った親の悲歎のそのままに、今は亡き愛犬や愛猫の冥福を祈ってやまない人々の姿を尊く感ずるのであります。

彼岸の時期は、丁度、寒暑と昼夜の中正となる時であります。天地の運行の中正なる時であります。天地中正の時、人も亦、中正を得ようとする時に適當するのであります。

大智度論に「彼岸につとめる一日の善は、他の百日に相当し、七日間の善は、七百日に当る」と示されてありますが、そのことを奨めたものであります。

「彼岸」とは、極楽浄土であり、仏の境界であります。私共の魂の故郷であり、最後の安住の地、おちつくところであります。いろはがるたの、最後の「京」であります。安住の都であります。此の世の安住の場は、我

が家がありますが、人生の旅路の安住の地は、彼岸であります。

お寺には、必ず本尊様がおいでになる。これは、彼岸のありかを示したものであります。仏様は彼岸の主でありますから、お寺へ行ったら、かならず参るべきものであります。これ仏教徒の心得であります。

参る時には、かならず合掌をして礼拝いたします。これは此岸の衆生たる私が、彼岸の仏と一体にさせて頂ける妙境を示すものであります。

口に南無阿弥陀仏と唱えます。これは、阿弥陀様と私共が一にさせて頂く姿であります。

浄土宗の二祖鎮西上人が、不離仏、値遇仏と申された姿であります。仏様と離れない私にさせて頂く、仏様におあいしている私に気づかせて頂く。これ南無阿弥陀仏であります。月かげの至らぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ

春は花、夏ほととぎす、秋は月。宗祖様も秋の月を眺めて、念仏の心を歌われたもので



ありましようが、月は仏様、月は彼岸でしよう。月かげは、仏の光、「彼岸のひかり」であります。その光は、実は、私の所にも、あなたのもとにも届いている、と申されるのであります。けれども、彼岸の月に目を向けるか否かは、私共の心にあります。目が目標を見たら、目標は目の中にあります。彼岸に心がむいたら、彼岸は私共にあります。私共が仏様を念じたら仏様は私共にあります。これ、南無阿弥陀仏。これ彼岸の精神であります。

あかあかや あかあかあかや あかあかや
あかあかあかや あかあかの あか

これは明恵上人がつくられた月の歌であります。月の光の中に自分がある。月が私を見、私が月をみる。月と私と一つの光景であります。これは又、日本の祖先達の心情でもあります。自然と人間とが一枚になった生活であります。祖先と自分達とが一つになって生きた生き方であります。自分と他人とが一味とけあい助け合った生き方であります。法然上人は、この生き方を、仏と私共とが一

つになつて生きる宗教として教えて下さったのであります。凡聖不二、一味平等の彼岸の姿であります。

かつて「浄土」誌に 自分一人では生きられないと知る心が彼岸の心であると ありましたことを感銘ぶかく記憶しておりますが、これであります。そこから、感謝の心、報恩の行、慈愛の精神が生れ出てくることなるのであります。

芥川龍之助の作品で、カンダタという男の話があるのを、ご存知であります。この男は生前、放火、殺人、強盗という大悪盗でしたので、死んで地獄に墮ちました。お釈迦様が極楽の蓮池のふちから、地獄の底をご覧になって、血の池にもかくカンダタを見つけられました。お釈迦様は、カンダタが生前、たった一つ善いことをしたのを思い出されました。それは道を歩いていると一匹の蜘蛛がはっていました。カンダタは、ふみ殺そうとしましたが、可愛想に思つて助けてやりました。お釈迦様は、この事を思い出されて、善



い事をした報^いとして地獄から助け出してやろうとお考えになります。蓮の葉にとまっていた蜘蛛をおとりになって、地獄の底へおろして下さるのです。こちらはカンダタ、ふと空を見上ると一本の蜘蛛の糸が頭上におりて参ります。この糸に縋^{かか}ってどこまでも登ったら地獄からぬけ出せるにちがいないと思つて、上りはじめます。せつせと上った甲斐あつて大分上まで来ましたが、カンダタはそこで、シメタ、と笑うのですが、よくみると、地獄の罪人どもが、蟻^{あみ}のように、うようよと上ってくるのです。この時、カンダタは、自分一人でさえ切れそうなこの蜘蛛の糸に何千何万という罪人が上ってくるのだから、切れてしまふにちがいない。そうになったら自分も、元の地獄におちてしまわねばならないと考えます。そこで大声で叫ぶのです。

「これ、罪人共、この蜘蛛の糸は俺^{おれ}の物だぞ。おりろ おりろ」と。すると、今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、カンダタの手もとから切れて、カンダタも、他の罪人と共に、

再び地獄の血の池の底に沈んでしまふのであります。お釈迦様はこの様子をご覧になって悲しい顔をなさった。これはきつと、自分一人だけぬけ出ようとする、カンダタの無慈悲^{むじし}な心が悲しく覺召^{きめし}なされたのでありましよう。と書いてあります。

カンダタが上ろうとして墮^おちる。俺^{おれ}の物だと思ふ所の世界が此岸^{こがん}であります。われ一人生くるあらずとて感謝^{かんしゃ}と報恩^{ほうおん}と、慈愛^{じあい}とをもつて自他共に生きる悦^{よろこ}をもつて進む彼方が彼岸^{ひがん}であります。

思えば現代は、彼岸という人間の眞実の生き方の「目標」を見失っている時代であります。

「心仏を造り、心鬼を造る」と申します。人間づくり、人づくり程、大切なものはありません。彼岸に生きる人にして始めて心仏を造ることが出来る筈^{はず}であります。

その出発点となり、その根本となるのは、何と申ししましても結^{けつ}婦^ふ一行三昧^{いっぎょうさんまい}南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}であります。



政治と仏教



浄仏国土成就衆生

——政治に仏教を生かすこと——

栗 本 俊 道

(東京大塚西信寺住職)

ことは春以来統一地方選挙から始まって先頃の参議院通常選挙まで、世間は選挙にあけくれたが、そうした選挙のかけ声は、明るい正しい選挙の推進であった。わたくしは、選挙管理委員会の委員という公職に就いていたので、中央に地方に「明るい正しい選挙推進協議会」や、推進委員の制度が全国に設けられている機関にも関

係していた。その選挙の結果生れてくる議員によって政治が行なわれる。人間の世界において政治とは、その世界に住む人間の幸福な生活のためにその環境を良くしてゆく仕事なのである。

仏教でいう「浄仏国土成就衆生」は、明るい社会で人間生活を完成することに外ならないし、明るい正しい平

和な世界をつくりあげるための政治が、仏教の三宝精神そのものであることはいままでもないし、聖徳太子の十七条憲法はその精神を具体的に示し得て余すところはない。わたくしはかつて十六年間に地方議会に、四年を選挙管理に従事したが、それは政治と仏教との勉強であった。その勉強の成果はそうした分野に生かされていることを信じているものである。

「浄土」誌が「政治と仏教」特集号を企画されたことに敬意を表するものであるが、あくまでも「浄仏国土成就衆生」の方便としての政治観に立脚することを根本と考え、政治と仏教とを併列して論ずることの愚は避けなければならぬ。政治に仏教を生かすことであり、明るく正しい政治が仏教の三宝精神による政治にほかならないからである。また真の政治は政治の事に当るものの使命感が第一要件であり、そうした政治が大衆に信頼と感激を与えるものである。最近日本の政治において、脱政党とか政治不信とか政治無関心などの言動が流行している。政党の生命は政策の遂行であり、公共の福祉、人同社会の生活において国家社会を支える責任ある政策を実行する政党が政治を行なわねばならぬことはいままでもない。従てこうした流行語が現われていることは今の政

治が、信頼と感激を失なっている証拠でもあらうか。政治に仏教が生かされていないからである。

仏教者が政治に無関心であってはならない根本理念は、われわれの生活が政治によって実践され、仏教は人間の生活を規範しているからである。生活と一枚の宗教が仏教であって、現実の世界から逃避する生活は人間を完成させる仏教の目標ではない。浄仏国土成就衆生という所以もそこにあると思う。そして往年安藤正純氏が国会に議席を置き、政党の重鎮として文教政策に力を注がれ、椎尾弁匡氏が同じく議席を持つや同志と計って明政会の一党派をつくって、仏教者の真骨頂を政治に生かそうと努力されたことも、こうした考え方にほかならなかったであらう。

政教分離と祭政一致とはいろいろ論議されたが、政治に宗教を忘れ、政治家が敬虔な祈りの気持を失ったとき明るい政治を求めることは困難であり、正しい政治は権力によって動かされたりゆがめられたりになりがちであることは過去の歴史が証明している。偉大な政治家は偉大な宗教家であることは洋の東西を問わず世界の国々に示されているし、福祉社会、文化国家の建設に基本的要素でもあらう。ただ自個の信仰には妥協はないが、政

治には公共の福祉と調和する原点において個人の妥協はあり得るものである。政教分離の理念もそこに存するわけであらう。

政治に仏教を生かすことの必要性は、明るく正しい選挙に始まる。選挙推進の運動が大衆教化の運動となり、政治家が無我奉仕の公僕主義に徹底して行動するとき、国民の政治が行なわれる。仏教者はそこに指導的立場をとるべきであって、明るい政治の精神運動を強力に展開すべきものと考ええる。曾て、松本徳明氏らと仏教政治同盟を結成したが、その意図するところは政治に仏教を生かすことにあっていわば政治を正しくする啓蒙運動であったが、仏教者に政治に対する使命感が乏しく、所謂世間の政治結社と同断のものと考えて基本的要素を誤解して、同盟存在の意義は没却された。現在仏教徒政治同盟となっているが、こうした考え方に立脚して進んで行くことを切望して止まない。

政治に仏教の理念は基本的要件であるが、仏教には政治は必要でなく政治権力によって動かされてはならない。政治は人間の進歩と調和によって進められるが、仏教は人間の救済と福祉を使命とする信仰の生活であるからである。仏教が伝道教化を第一義とし教団宗門はその

ために運営されているので業務連絡の宗教機関はあっても、それは政治ではないし、宗教という名で権力争いをするものがあれば、それは仏教運動を逸脱したもので、政治と仏教を語ることはできない。政治に仏教を生かそうとする運動は、強烈な三宝精神の体現によって達成される無我奉仕の運動であって不求自得の利他行にほかならない。仏教と政治とを混同したなら自損損他の仏教転落の道を辿ることであらう。

政治と仏教については、そのような考え方から政治の倫理化運動が仏教徒のやるべきことであり、つまり政治に仏教を生かす運動であって、やみくもに仏教者は政治活動に入ってはならない。仏教精神を基調とする政治家をつくるのが大切なことであらう。そしてそこに仏教の教化活動が政治運動に影響浸透することによって、大衆の生活、世界の福祉のための明るい正しい政治が行なわれ、国民の信頼ある政党活動となるものである。要するに、政治は仏教の理念によって生かされねばならないが、仏教は政治によって左右されてはならないし、仏教の中に政治的要素は決して取り入れてはならないことである。



共生浄土の実現

稲岡 覚順

(埼玉川口市西福寺住職)

一 政治の基本姿勢

政治の政は「まつりごと」の意に発している。

このことは日本の政治を発生的に見ると、民を治め国を治める仕事は、神を尊み神の意志のまにまに行なわれることを、政治の要諦と考え、且つこれを実行して来たことを物語るもので、所謂祭政一致の思想の流れが、現代にまでうけつがれているものと、受取ってさしつかえない。

この政治に対する伝統的な流れは、明治維新となり立憲政治となり、又戦後民主主義政治、特に政教分離を明確化した新憲法下にあつては、国の政治機構は大きく転

換している。

又政治を志向する人々にも、宗教信仰者あり無宗教者あり、又その政策実現の手段にも漸進主義(保守)あり、急進主義(革新)ありで、その様相は多岐多端であるが、いやしくも政治に志す人士は、悉く自己の政治への究極ビジョンを描き、この理想実現のためには、身を命を惜しまざる信仰的態度を、堅持していることに相違ない。

従つて政治への基本姿勢は、あくまでも神を畏れ、民につかえまつる程の、敬虔な奉仕の姿であるべきことが要請される訳であるから、わが国本来の政(まつりごと)の精神に違背していないものであると、見ることができ

二 仏教の基本姿勢

この観点に立つて仏教を考える時、政治と仏教の相関が自ら明確となる。

仏教の理想は、「共に極楽(浄土)に生きて、仏道を成ずる」にある。即ち一切大衆と共に相たずさえて、仏道を成就し、共生浄土(共に浄土に生きる)の実現を急ずる法門である。

「この願、満足せずんば、誓って正覚を成ぜず」

これは遠い昔、世自在王仏の世に現われた修業者、法蔵菩薩が、大誓願をたてられ、この誓願成就をめざして、兆載永劫の修行に入られたのであるが、その折の決意ひれきの言葉である。

この願とは一切の衆生が悉く、生き甲斐ある信仰的生活の出来る浄土の建設を志願されたのである。そしてこの志願が果たされない限り、自ら仏とはなるまいとの悲壮な決意の許に、永遠の苦行に入られたのである。

法蔵菩薩の志願はその仏教の志願である訳で、仏教の志向する所は、一切衆生の共に救われる世界の、建設に外ならない。

従ってこの教の信奉者は、一人残らず法蔵の悲願を悲願として、理想社会の実現のため、いつでもどこでも、生命を惜しまざる献身が求められるのである。仏教徒たる者は、老若男女を問わず、いずれの職種職域(しよくしやく)を問わず、あくまで為法不為身を基調として、一億大衆に対して、奉仕の生活が要求される訳である。

これが仏教の基本姿勢に外ならない。

三 政治と仏教

この立場に立つ時、政治の志向する処、仏教の志向する所、自ら相通するものがあることが判る。

仏教の志願する共生浄土は、単なる信仰上世界に留まってはならない。吾々のふまえているこの地上に、この現実社会に浄土の実現をはかるべく、全仏教徒が立ち上るのでなければ、仏教はこの世の存在価値を失うからである。かく見る時、仏教の進路も自ら判る。

即ち仏教徒は従来政治に対する消極的態度をすてて、その視野を政治的方面に拡大して、その活動分野の展開を期することが、喫緊事である。

地方自治及び国の行政が、そのまま住民の福祉に通ず

るものである以上、公害問題、住宅問題、沖縄問題、対中国問題等、山積する行政上の諸問題にも、直接発言の場をもち、これが解決に努力することが、極めて当然のことである。

すべからく仏教徒特に僧侶は、この際従来の優柔断性を一擲して、仏教本来の使命に鑑み、進んで政治的進出をはかることが望ましい。

仏教の政治的進出は望ましい姿であるが、これによって所謂仏教政党の実現を期するものではなく、又そうあってはならないと考える。政教分離を立前とする、わが国憲法下において、もし敢てこれを強行するならば、仏

教政治は大眾から離反され、その存在を危くすること、あたかも創価学会と公明党の愚を再現するものとなるからである。

仏教徒の政治進出を歓迎しても、その帰属すべき政党政策は拘束してはなるまい。

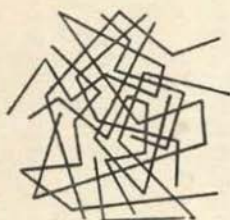
保守革新、いずれの政党政策をとるも、帰する所、仏教政治の究極が成仏道であり、共生浄土への前進であればよい。

要は仏教が政治に反映し、政治即仏教、仏教即政治の大道が、一歩つつ前進する社会の実現を希求する訳である。

政治と仏教の接点

白 幡 憲 佑

(横浜久保山光明寺住職)



この表題を与えられた筆者は、この両者、(仏教を宗教といい換えた場合)の歴史的な関係を考えたとき、ま

ったくもって困難な表題であると告白せざるをえない。ヨーロッパに於ける政治がアリストテレスの都市国家

(ポリス)に於ける人間の最善、最高を希求する方法として価値づけられて以来、政治と宗教の対比、関連は人間社会のもつ宿命的な課題となつていゝといえよう。日本に於ける政治が「まつりごと」という日本語からでて祭事と結びついていたが、現在に於てはヨーロッパの持つ政治形態と全く同一的な意味あいを持つてゐる事は周知のことである。

アリストテレスの至高善を求めたポリスの運営方法も又、祭事よりでた日本の政治もやがては戦争、そしてこれの起因となる思想、経済の激流にながされ現在の政治不信、いい換えれば政界の浄化がのぞまれる現状に連らなつてゐるといへよう。

政治に対して人間が不信感を抱いた時に人間は宗教の力によつて政治の場に倫理をとりもどそうという努力を必らず続けるのである。これはギリシヤの時代から今日迄の歴史が教えてゐる。

政治と宗教とは相対的な存在である。宗教とは非政治的なものである。しかし、人間は同一の内面に於て政治的なものを欲求する反面、心の救済も又、ねがわざるを得ないものなのである。

さて仏教徒は政治に対して希む場合に必らずといつて

よいほど簡単に浄仏国土成就衆生の言葉をもつて仏教徒の政治理想とおきかえてゐるのである。筆者はこの言葉をあえて政治理想とおきかえたと表現するのは、この言葉のもつ意味あいは飽く迄も信仰上の理想図、世界観であると考えからである。若し本氣になつて仏教徒が今日の政治形態にこの世界観を具現しようとするならば、それは政治の破壊を意味すると共に仏教の持つ真理、宗教性の尊厳さをそこなう結果となる事を知るべきである。それは政教一致を意味するものなのである。

人間は同一のなかで政治的欲望をもつて同時に心のやすらぎをも求めるものである事を前述したが、政治とは本来、人間の心の問題を解決する力は皆無なのである。現実の問題に対して良かれ悪しかれ人々の意見の妥協の上になりたつものが政治なのであり、最初から「絶対者」の追求はすて去つてゐるのである。そこに政治の持つ虚偽、墮落が非難されてくるのである。

それでは宗教的人間がはたして政治家として生きる時に立派な実績を残すことが出来るのであらうか。宗教の次元と政治の次元のギャップを知つた時、これにも非常な困難さを覚えるのである。あまりにも潔白な為に政治運用が混乱におち入る事も過去の歴史は示してゐる。

それでは吾々は政治の不信、墮落を容認して生きていかなければならないのか、否である。もともと厭世的な生き方も現実の政治に対する反抗としては考えられるが、現実社会に於ては無理といわねばならない。人間社会のある限り政治は永久に廃止されないであろう。それならば吾々は政治の在り方を監視しつつその中に宗教的情熱を求めていく以外には道はないのである。宗教的理想を政治の場に置き変えるのではなく、政治の世界を容認しつつ常に宗教的理想を説得しつつづけることなのである。

ここに至ると現代の政治を政治として本来的なものへと教える道は仏教のみである事に気付くのである。政治が人間の生活という現世的なものを意味し、人の意見の妥協の上に存在するとき、キリスト教に表現される宗教的人間は常に政治とは対極的な立場にあって彼等は絶対者の言葉の創造に服従し、妥協を許さず、信仰上に非寛容を持たなければならない。そこには政治に於ける専制

の危険を感じさせられるのである。仏教のもつ寛容と慈悲、これこそ現世の政治良化を求めると共に現世を超越するものの存在を求める人間の必然欲望に答える宗教なのである。

政治が現世的な判断に立つて行使される時に同時に真理（仏陀）への帰依が志向されてこそ人間社会はなりたっていくのである。これは人間の個人内面に於ても、生活上、思考上に政治的欲望と同時に絶対無我の仏教的情熱を持たせる努力を仏教人は、はたさなければならぬ。この宗教欲望が与えられない時に人間はイズムにその生き甲斐を求め、革命運動となったり、国家に生き甲斐と死に場所を求める結果となるのである。浄仏国土成就衆生は人間の宗教的欲望の理想図として吾々は高く向揚し、現世の政治に対して説得の旗じるしとしなければならぬ。だが決してこの言葉を仏教のもつ政治理想図などと思ひ誤ることは避けなければならない。

政治と仏教

〈特集〉



七か条制誠の

京都を中心として、法然上人の教えは、あらゆる階層に広まっていった。そして信者や門弟の中には上人の教えをはきちがい、自由勝手な振舞をするものもでてきたが、それよりも旧仏教教団は、その発展をねたんだ。そこで元久元年（一二〇四）一月、叡山の衆徒は専修念仏の停止を座主真性に訴えた。上人はこの年十一月七日、七か条制誠を作り、一八九名の門弟に署名させて座主真性に送り、九条兼実の斡旋も功をそうし、この場は落ちついたが、専修念仏の教団に対する圧迫はきびしくなっていた。



興 福 寺 奏 状 (18)

元久二年（一二〇五）九月、南都の興福寺では専修念仏の欠点を九つあげて、念仏の停止を後鳥羽院に訴えた。ところが院をはじめ、摂政九条良経、藏人頭三条長兼は念仏に好意をもっていたため、容易に取り上げなかった。興福寺の衆徒はすごいけんまくで怒り続け、院のおそい態度に不満をもち、上人をはじめ弟子たちまで重科にすべきだと執拗（しつこう）にくいさがった。この大事なときに九条良経が急死し、その上悪いことに、建永元年（一二〇六）の暮には住蓮・安楽の鹿谷（しかたに）事件がおき、状勢は大きく変っていった。

松濤達文 画
玉山成元 文

浄土歳時記

〈きくづきの巻〉

九月の異名はいうまでもなく「きくづき」である。花の乏しい盛夏を過ぎて、九月に入ると共に、早咲遅咲、色とりどりに菊が咲きはじめるところから、実際は今の九月ではないにせよ、九月は「きくづき」とされたのであろう。だが今は違ふ。本堂のお花をお願いしますと電話をかけると、一月から十二月まで、花屋さんが届けてくれる一対に、菊がはいっていないことはない。この分では正月から一年中菊月で、異名の方も「色取月」とかいふ別の方でないと九月は表わせないかも知れない。尤も年中菊の盃で、菊の宴をはれるせい、日本人の寿命はのびるばかり。二十年後には老令人口で日本中が埋まるそうだが、延びた寿命も、電球で咲かされた電照菊並みに、何の変哲もない規格人間ばかりとあいなつて



二松学舎大学講師
浅草西光院住職

若林 隆光

は、如何なものであろうか。しかし更に考えてみれば人間の本質というものは、五十年や百年で急に変るものでもないことは、菊の花がどう咲かせたとところで菊の花以外のものではないのと同じであらう。世に創価^{くわ}にながしと名のる宗教団体があつて、価値を創り出す^{つく}学問の会のように思えるが、新しく価値を創り出すことなどは人間には出来ないのではないだろうか。電照菊を発明した人は、一見新しい価値をつくり出したように見え、当座の利益は得たであろうが、われもわれも一年中を菊月にしてしまった今は、菊という花から、二度とふたたび取返すことの出来ない色や香りを奪い去ってしまったように思われる。「菊の香や 明治は遠くなりけり」という菊はお元日の大輪ではなくて、やはり秋の黄菊、白菊で

なくてはなるまい。

さて。

人は死ぬときの様子によって、生前の心がけや、死後の有様がわかるといいますが本当でしょうか。

そういうことをいう人もあり、生前の心がけが一部臨終に反映することもあるでしょうが、それで死後のありさままでわかるというのは行き過ぎです。

昔から高僧の臨終にはその種のことがいわれ、事実奇蹟を示された方も多いようです。元祖法然上人も建暦二年ご往生の際には紫雲がたなびき、蓮花が降る奇瑞があったと伝えられています。別の伝記ではさしたることも無いただ静かなご臨終であったようにも、伝えられています。でもそれで良いのではないのでしょうか。眠るが如き大往生や、お世話になった方々へお礼の言葉を十二分に述べて落着き払って死ねるのは、もとより望ましいことでしょうか、そうは問屋でおろさないのがわれわれ平凡人の一生です。「死にともな、ああ死にともな、死にともな」というのが偽らぬ心情でしょうし、「今日までは、他人のことだと思つたに、おれのこととは、こいつはたまらぬ」ともがき苦しむのが、大方のありやうです。癌と中気だけはご免だといつていた人も癌や中気で他人の世話になり、千年も万年も生きたいわといひながら死

んでいかなければならないのです。そういうものがき、苦しみ、残り惜しさの中でも、死んで生かなければならないのが、われわれ凡人であり、それだからこそ、わたくし達には阿弥陀様の救いが必要なのではないのでしょうか。お米を豚に食わせる程あまらせながら、自分たちの子供も思うままに生むことが出来ないような浅智恵で、生命の問題を軽々しく口にするのは如何なものでしょう。

「ばんだい号」で遭難された方々も「全日空の727」で亡くなられた方々も、往生される方は間違いなく往生された筈です。平素の心がけが悪いから災難にあうのよとさかしらにいうことは易いことですが、善いとか、悪いとか、簡単にいい切れるものではありません。電照菊を作った人や、農薬を発明し、ひたいに汗して働いた人たちは決して悪い人ではない筈です。それなのにその結果は如何でしょうか。

病氣は苦しいものです。そして五年や十年の差はあつても、人は生れ、老い、病み、死していくことを免れることは出来ません。思い上りを捨てて、素直な苦しみの中に生きる喜びを少しづつ味あわせて頂ければ、後は仏さまの大きななからいにお任せ致すほかはありません。不慮の災難にあわれた方々のご冥福を心から祈ります。ナムアマミダブツ。

孝子善之丞物語

第二回

(1) 父の業病

正徳四年三月、万物躍動の春、のどかな農村にも労働の闘いが始まった。野に山に人影が日暮れまで動いている。働く人々を慰めいや励ますように小鳥が囀っている。正に平和そのものである。

だに善之丞一家は暗かった。去年から父善四郎の気力が衰え始め、疲れたと言っては二日も三日もブラブラする日が多くなった。入梅に入った頃から顔の数ヶ所に赤い斑点が生じ、化膿してくる。

善四郎は珍らしく、毒ダミを煎じて飲んだ

吉田光寛

(岩手県紫波・極楽寺住職)

り薬草を使って顔や腰などにつけたりしていたが、次第に患部が拡大するばかりで、日に増し見られた顔ではなくなった。

明けて善之丞十五歳の春、父はとうとう寝ついてしまった。善之丞は母と相談して、父の反対を押し切って医師を呼んだ。診察の結果は善之丞母子を失望させた。癩病なのだ。

「不治の病と諦めるがいい。白石から白蛇の薬を買って服用するなら、或いは癒るかも知れぬが」と医師はいう。

(3) 白石行

陣屋に納める年貢も滞りがちな一家であったが、善之丞は白蛇の高価薬を求めて、金策

に奔走した。癩病ときいて殆んど出入りの杜絶えた親戚や、父の友人を毎晩のようにまわって、一月程かかってやっと一両の金を調達した。そして医師から紹介状を買って薬を買いに行くことになった。

「おっ母やん、あした白石さ行ってお父ちゃんの薬買ってくっかんな」

「そうか、気をつけて行つて来なよ」

宮城県の白石までは二二キロ、未だほの暗い早朝五時に出発した。

「三時までには帰ってこれっべ」

「休み休み行きなよ、峠から落ちねえようにな」

母は案じて色々と注意した。力づく歩いて行くわが子のうしろ姿を、拝みたい気持ちで見送った。

国見峠の眺望は天下の絶景である。なだらかな山麓、東方遙かに阿武隈連峰が連なり、善之丞は知らなかったが、南朝の忠臣北畠顯家が籠って神皇正統記を書いた靈山も中腹に見える。労働で鍛えた青年は些程疲れも覚えずに、頂上で一回休んだきりで、白石の町へ入ったのは予走よりもずっと早かった。

大正年間に、溺れる児童三人を救わんとし
て殉職し、全国民を感動させた小野訓導の美
談を持つ白石町は、当時でも見馴れた桑折の
町よりは遙かに大きく屋並がぞっくり並んで
いた。さほど迷いもせず薬屋を探しあてて店
頭に立った。

(3) 店頭で

善之丞の前世は犬だった。寺に飼われた犬
だった。参詣人を吠え悩ませた罪障で畜生に
輪廻するところを、念仏の法音をきいた功德



店頭の情景（伝記のさし絵から）

で人間には生れたが極端なでもりだった。

「白蛇ちゅう薬あつてか。あつたら売って
くなんしょ」と言つたつもりだが、番頭共は
吹き出した。大人とも子供ともつかぬみすば
らしい小男の青年百姓が、妙なことを口走っ
ている。

「何だ。猿じゃないか。いや唐人の子かも知
れぬ。何言つてつかさっぱりわかんねえ。」

番頭達は笑い乍ら顔を見合せた。そこへ主
人らしいのが現れた。「こら、何をふざけて
いる。」と小僧を叱つて善之丞をみる。善之

丞は主人と直感したのか、一礼
して風呂敷包をととき、大事に持
つて来た医師からの紹介状を差
出した。

店主は披見して肯づいた。立
上つて暫ししてから再び出て来
た。

「はい、二十日分だよ。お前は
大変親孝行で働き者だというか
ら上げて上げるよ」と立派な薬
袋を差出した。

(4) 母あればこそ

店を出た善之丞は淋しかった。胸がいたか
つた。「俺はどうしてこんな不具に生れたの
だ。どこへ行つても笑われ、馬鹿にされる。」
帰りの途道、もたえ考えた。「一層死のうか。
いや死んだらわが家はどうなる。」

千々に胸を砕いて、悩みつつ歩き、歩きつ
つ思案したので、帰路の足取は重かった。家
では母が案じていた。三時には戻ると言つた
のにもう五時だ。幾度も北の方を眺めて氣に
しているところへ、「買つて来たよ」善之丞
の聲がしたので母はほっとした。

「あんまり遅いからどうしたかと思つてお
らあ、心配してだよ」いかにも安心したよ
うな母の声をきくと、善之丞はこの母を残し
て、自殺なんか、とてもできないと心に決め
るのだった。奥の方から軽い咳と共に、

「善之丞、善之丞帰つたのか」父の叫ぶ声
が聞えてきた。

延びた笹の春の日もあたりはもう夜のとは
りに覆われていた。



その時わたしは時間を知ろうとして、テレビをガチャガチャまわしていた。そうしたら、四十才前後の母親が十二、三人、わたしぐらいの子供が三十人くらい向かい合ってすわっていた。そして何か話し合っていた。なんとはなしに見えたら、いろいろな縁起について話していることがわかってきた。子供達がいろいろな縁起をあげていた。

「茶柱がたつと縁起がいい。」

「家の中から、くつをはいて外へ出ると縁起が悪い。」

「朝ぐもは縁起がいいが、夜ぐもは縁起が悪い。」

「北まぐらをして寝ると縁起が悪い。」

など、ほかに聞いたこともないような縁起がたくさんでてきた。このあとで、縁起を信じるか信じないかの問題になった。司会者が母親達に向かって、

「おかあさまの中で、縁起を信じる方はいらっしゃいます

縁 起

〈小學生の声〉

=横浜市在住=

柴 田 直 美

か。また、そうまでいなくてもたいへん気になるという方は?」

と言ったら、親はだれも手を上げなかった。こんどは子供達に向かって、

「君達は縁起を信じる?」

と聞いた。するとワアッと手が上がった。全員かと思つたが、一人だけあげない子がいた。ここではじめておもしろいなと思つた。続けて見てみると、司会者が手を上げなかった子供に、

「どうして縁起を信じないの?」

と聞いた。その子は、

「わたしが一度、うちの中から新しいくつをはいて外へ出たけれど、何も起こらなかったし、夜つめを切っても何も変わつたことはなかった。」

と言った。すると司会者が、

「でも、少しは気にするでしょう、やはり……。」

と言うと、

「その縁起をわざとやってみようという気持ちはあるが、それをきけるという気持ちはありません。」

と言った。そこでコマーシャルになった。わたしはテレビを消すと考えてみた。よく祖母からは、縁起をうるさく言われる。例をあげると、この前の夜つめを切っていたら、夜つめを切るのはいくれないと言った。しかし、父や母からはあまり聞かない。それなのに、もう少し年令の低い今の小学生に聞いてみると、大部分が縁起を気にする、縁起を信じると言ったのがちよつとふしぎだった。そこで一番身近な家族はどう思っているのだろうかと思ひ、調査してみた。

まず、一番縁起に関心を持ちそうな祖母に聞いてみた。

「おばあちゃんは縁起というものを信じる？」

「やはり信じるね。」

と、すぐ返事がかえってきた。またどうしてかと聞くと、子供のころ縁起を大切にしないと出世できないと言われていたそうだと。それならばと思ひて聞いてみた。

「夜つめを切つてねるといやな気持ちする？」

「いい気持ちはしないね。」

この祖母の返事から、子供のころからの習慣というものが、「おばあちゃん」と言われるようになってからも残っていることに気づき、おどろいた。

つぎに母に聞いてみた。

「縁起を信じる？」

「全然信じない。」

「では、それをやってみようという好奇心はある？」

「それもない。つまり縁起をまったく無視しているのだね。」

「子供のころ、縁起をうるさくいわれた？」

「少しいわれたけど……。」

ずいぶん神経の太い母だと思った。

最後に男の人の考え方が知れたかったので父に聞いてみた

「まず、縁起を信じる？」

「うん、むずかしい質問だな。」

と言つて答えてくれた。

「少々気にする。たとえば夜ぐもは縁起がわるい。夜つめを切るとやはり、いやな気持ちをする。でもおばあちゃんみたいに強いものではないんだよ。それに北まくらなら、して寝ても平気だよ。」

と言つた。

「どうして？」

「だって、北まぐらは医学的にならだにいいと言われているのだよ。」

と答えた。ここでおもしろいことがわかった。それは縁起を信じるといっしょに科学も信じるということだった。

みんなの意見を聞いてみてわかったことは、その人によっていろいろな考え方があったことだった。これは、はっきりした。

では縁起はいつごろ、どういうことから起こったかを調べてみた。大化の改新のころ、今の山口県の国司であった、くさかべのしこつねという人が、白いきじを天皇にさしあげた。そしてこれが吉兆（よいこと、わるいこと）となり、縁起のおこりとなった。そして平安の末、生死をかけて戦う武士の間にまじないの心理作用が強くなって、いろいろな縁起が生まれてきた。このことから昔から、縁起が大切とされてきたことがわかる。

たくさんさんの縁起の中から、食物に関する縁起を母に聞いてみた。

・たくわんを三切れつけては縁起が悪い。これは身が切れるからだという。

・まめに一年働くようにと、正月に豆を食べる。

・茶柱が立つと縁起がいい。

・水をさしてから湯をさすと縁起が悪い。

・たいはめでたい魚とされている。

・ぶりは出世魚とされている。これは、ぶりが生まれてから親になるまで、からだの形が七かい変わるからだという。

今あげてみただけでも、ただのごろあわせにすぎないものが多い。

最後にわたしの意見をまとめてみた。このテレビを見るまで、縁起なんていうものはただの迷信にすぎないのだから、縁起にもかけなかった。しかし、母みたいに強いものではなく、縁起をやってみようという好奇心があった。また、縁起のためにびくびくしたことも少しはあった。たとえば夜つめを切ったらやはりいい気持ちで寝られない。でもそれは今度の調べで、迷信だということがはっきり心にきざみこまれたみたいだ。そして新しく発見したことは、縁起は昔の人々の喜び、悲しみ、願い、ちえなどをいちばん簡単に表わしたものだということだ。だから後世まで縁起を残しておくべきだということを感じた。また後世の人達も、ただの迷信だと思わず、この縁起から昔の人々の気持ちをよく考えてみるというと思う。つまり縁起を大切にすることは、昔を大切にすることだと思う。それは縁起を信じるか信じないかよりも、もっと大切なことだと思う。



蓮華王院への道

ある日、京都東山の天台宗の門跡である、妙法院から電話があった。妙法院は、天台宗の門跡のなかでも、五箇室門跡といわれる由緒あり、伽藍も整った立派なものであるが、電話の用件はこうである。

私の方の寺である三十三間堂が、法然上人の遺跡であるといわれているらしいが、それについて、三十三間堂には、何の文献もないので調査して欲しい。

なるほど三十三間堂としては、別に法然上人の遺跡という文献がないのに、この三十三間堂に参拝する本宗の檀信徒や、住職が、法然上人の靈跡ということで、寺の人に質問するらしいのである。

たしか昔は、この寺にそのようなことを記された表柱があったように思うが、今は何も残っていない。それなら、案内の人たちがまごつくのも当然であると思う。

そこで一応こたえておいた。

三十三間堂のことについては、浄土宗側の史実のなかに、法然上人がここに来られた文献があるので、遺跡にして残すのには、いづれ改めてお願いするようになるでしょう。と。ところで、この三十三間堂には、法然上人が後白河法皇の十三回忌のときに、この寺で浄土三部經の写經をしておさめているのである。

道



和 良 橋 高

法然上人の一生のうちには、写経のことなどはあまりないが、この三十三間堂へは、はつきりと写経して奉納している。

最近、知恩院布教師会で、百万人の写経運動を展開しているが、その果のなかでも、はつきりと三十三間堂の法然上人の写経のことを記して、ここが上人の写経の最初であると述べている。文獻に、四十八巻伝の第十巻に

元久元年三月に御仏事を修せられけるに、上人蓮華王院にして、浄土の三部経を書写せられ、能声をえらびて、六時礼讃を勤行して、ねんごろに御菩提をぞ訪ひ申されける。とある。

蓮華王院は三十三間堂のことである。

この三十三間堂は、長寛二年（一一六四）に、平重盛が、後白河法皇の命をうけて造営したものであって、その後火災にかかって全焼したのが文永年間に再建している。

変事わらべうたに

京の変大仏さんは天火でやけてな、

三十三間堂がやけのこった、

ありや、どんどんどん

こりや、どんどんどん

といううたがある。これは天明の大火のとき三十三間堂が残ったことをうたったものである。

三十三間堂は、本堂は三十五間と七間で、平安朝時代の末期にあらわれた、千鉢観音堂の形式をつたえるものがある。

三十三間堂というのは、内陣の柱の間が三十三間あるからで、これは三十三相をあらわ



し、観音菩薩の慈悲の姿を具現している。

そのお堂の中央の本尊さまは、十一面千手観音であり鎌倉時代の湛慶の作とつたえてい

る。
湛慶が八十二歳の作といわれるから、晩年の大作なのであらう。そしてこの本尊の両側に五百体づつ本尊を加えると一千一体になる。

このお堂の西側には、いわゆる通し矢として知られる矢場で、昔はここで通し矢を射たのである。その武勇を語る絵馬が、このお堂のなかにあげられている。

法然上人は、このお堂で、後白河法皇の、法要を営まれ、能声というから、声のよい僧侶をして、六時礼讃をとなえさせたのである。

おそらくお堂のなかには、ひびきかえるような礼讃のハーモニーが流れたことであらう。

お堂は大きいし、此の構造からして、おつとめの声がまるで混声合声のように美しいものだったと想像される。十六門記によれば、法然上人の御影を、藤原隆信が画いたということ、それを本堂におさめたらしいが今はその影すらない。

ただ一つ、お堂の向拝の横手に、名号石というのが残っている。これは都名所図絵にもあるくらいだから、ひよっとすると、法然塔といわれるものであるかもしれない。

然し、三十三間堂に法然上人の遺跡が残っているのは、寺側も知らないのであるから、なんとか、また顕彰して欲しいと思うのである。

三十三間堂棟木の由来という、歌舞伎があるが、母と子の愛情をつづつたものである。それも昔の物語りになってしまっている今日である。

法然上人のことなどは、忘れられてしまっているのだらう。

浄土宗の古刹をたずねて

東海道線の愛知御津駅を降りると、前方に腕を伏せたような小高い御津山がある。一名大恩寺山という。山頂からは三河国定公園の景観を一望に見渡せる。大恩寺はこの東麓に位置している。総門をくぐり抜けると、白壁の山道が続く。こんもりとした木々と対称的に、しっとりと落ちつく。中程よりなだらかな階段になり、登り終。たところに山門が佳麗な姿をみせている。寛文十二年、大垣城主戸田采女正が建立したもので、形は小さいが京都の知恩院や南禅寺の山門と同形のものである。この山道を歩み山門に至る間に心よいほど気持が落ちつく。山門を出ると御津山を背にして、中央に雄大な本堂が聳え、左に阿弥陀堂、右に鐘樓が位置している。念仏堂は天文二十二年に外護者牧野保成・成守らの建立で、室町期のものである。建築様式が左右とで異なり、全国的にも珍らしい。

大恩寺はもと新宮山にあった。文明年間、

千葉県飯沼弘経寺二世・了暁慶善は後席を弟子の曜普西岡に譲るや、浄教念仏弘通の遊歴にでた。たまたま新宮山にあった三論宗の古刹浄光院の荒廃を知り、再興し新宮山大運寺と号し浄土宗に改宗、念仏弘通の道場とした。その功あつて明応二年、後土御門天皇より紫衣の論旨を賜った。開山了暁はこの戦国の世にあつて荒廃し乱れた浄土宗の再建のため、厳しい寺内法度（四重禁之事）を規制し、僧侶養成にあたつた。その説くところの大要は「弘道の大途交衆の指南也」とあり、仏者の根本理念を強くうちだしていった。大恩寺二世の曜普訓公は了暁の直弟子で、のち同国岩津信光明寺、知恩院二十四世となつた高僧である。岡崎城主松平親忠は大檀那となり、延享年間、新宮山より現在の御津山の地

に寺を移し、諸堂伽藍を建立した。これ以後、御津山浄土真院大恩寺と改めた。明応八年には、後土御門天皇の祈願所にまで発展した。

開山了暁は多くの名僧を排出している。さきの西岡・訓公を始め、勢普愚底（大樹寺開山・知恩院二十三世）周普珠琳（知恩院二十二世）孫弟子の超普存牛、彼らは当時代における浄土宗の開拓者である。彼らの力によつて室町末期の浄土宗はつちかわれたといつても過言ではない。

三河松平氏が一時衰退した折、大恩寺は東三河に土着した牧野一門を外護者として以後牧野氏の菩提寺となつた。しかし、松平氏との関係は深く、江戸時代には朱印地百石、末寺、塔頭合せて五十余寺院を支配、東三河地方において豊橋の悟真寺と共に別格、独礼に位置した、三河三本山の一つである。

（佐々木洋之）

御津山

大恩寺

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三 碩 学
の 名 著 『浄土宗読本』 覆刻版

価 1000 円 〒 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

竹 中 信 常 著

新刊 『選択集に聞く』 B5判・308頁
価1000円・〒150円

発行所 教育新潮社

著者長年の選択本願念仏集の研究・既刊の解説書の集大成、選択集を現代に贈る平易な文面、浄土宗徒必携の好書。

浄 土 ト ラ ク ト

新刊 『浄土宗のおつとめ』 村瀬秀雄著

B 6 判 本文16頁 価 50 円 百部以上 45 円 〒 25 円

各々御用のむきは早目に本会へお申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

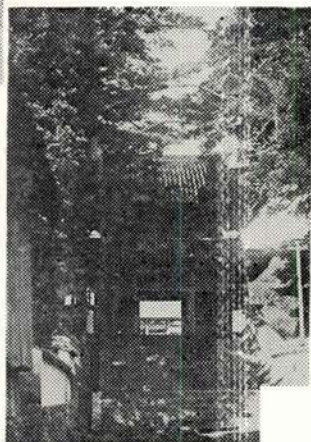
電話 (03) 262-5944 番



大恩寺本堂



開山了上人への
後土御門天皇紫衣の論旨



山門

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十六年八月二十五日印刷
昭和四十六年九月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会